

2005 (平成17) 年 12 月

AICHI UNIVERSITY LIBRARY COMMUNICATIONS

2005. 12

韋 編

いへん

愛知大学図書館報

No. 32

「韋編」……文字を書いた竹や木の札を、なめし皮の紐でとじた上古の書物。

図書館と私

豊橋図書館長 稲 垣 不二磨

豊橋図書館長は今期は国際コミュニケーション学部から選出されることになり、小生が担当することとなった。

大学の図書館といえば、三つのことが想い起こされる。第一は、夏目漱石の『三四郎』に、田舎から出て来た三四郎が出会った三つの世界の第二に図書館のことが出ている。そこでは、「片隅から片隅を見渡すと、向うの人の顔がよく分らない程に広い閲覧室がある。梯子を掛けなければ、手が届きかねるまで高く積み重ねた書物がある。手摺れ、指の垢、で黒くなっている。金文字で光っている。羊皮、牛皮、二百年前の紙、それから凡ての上に積った塵がある。この塵は二三十年かかって漸く積った貴い塵である。静かな月日に打ち勝つ程の静かな塵である」と描かれている。初めて大学の図書館に入った時、『三四郎』のこの箇所を想い起こした。

次に想い出されるのは、学生時代、出身校の図書館に行くと、いつも同じ二人のひとが来ていて、読書しておられた。今日こそ、それらの人びとより先に来ようと思って図書館を訪れてみると、もうその二人は来ておられ、本をひろげておられた。そのお二人は、後年、大きなお仕事をなしとげられた方々で



ある。

もう一つ想い出されるのは、岸本英夫先生が癌におかされた後、東大の図書館長として活躍された記録を読んだことである。先生は、生きることの証を仕事の内に求められた。図書館長としてその改革に挺身されたのも、そういう仕事の一つであった。先生が求められたことは、死蔵の図書をなくすことであった。東大には多くの研究所がある。そこには、各々、多くの図書がある。横の連絡がない。どこにどのような図書があるか、外部の者にはわからない。中央図書館に行けばその全てがわかるようにしたい、というのが先生の志願であった。先生は、ロックフェラー財団の援助を受けてそれを為し遂げられた。今日の図書館の礎をきずかれたのである。

学内のどこに、どのような本があるのか。また、自分が探している本がどこにあるのかを容易に検索することができることは、大学付属の図書館の大きな使命であろう。そのことは、本学においても、館員の方々の努力によって為し遂げられつつある。人員の面においても、財政の面においても、大学当局のバック・アップが不可欠である。どのよ

うな図書館に育てていくか、ということは、どのような大学に育てていくか、ということに深く結びついている。両者は別のことでないであろう。

ここで、大学の図書館についてではなく、個人の図書について、少し述べてみたい。私は、個人の図書について、「蔵書」という言い方はいかなものであろうか、と常づね思っている。図書館については、資料の保持ということで「蔵書」でいいであろうが、個人の図書についてそれでいいのであろうか。以前は蔵書印をつくり、それを押していたが、最近はやめてしまった。本は「蔵」さるべきものではない、と思うようになったからである。「蔵」と言えば、仕舞っておくという印象が深い。本は、使われるべきものであって、仕舞っておくべきものではないのではなからうか。そうした意味で「蔵書」という言い方はいかなであろうかと言ったのである。

「名号は掛けやぶれ、聖教は読みやぶれ」と言った人がいる。蓮如である。彼の時代、集会がもたれた時、軸に巻かれた名号（本尊）を会場に持って行き、床の間にそれを掛けて集会がもたれた。会が終れば、再び巻きとられ、次の当番の人に託された。集会のたびごとに開けられたり、巻きとられたりしたので、何回も何回もくりかえしている間に「掛けやぶれ」てしまう。それ程、しばしば集会をもて、というのである。彼はまた信者の人びとに朝夕の勤行をすすめた。そのたびごとに勤行本は開かれたり、閉じられたりした。それをくりかえしている間に本は「読みやぶ」られていく。今日でも篤実な信者のお宅には、そのような本が伝えられている。破れるまで読んだ本が何冊あるであろうか。生涯の間に何冊かはそうした読み方をしたいものである。「読破」という言い方がある。『広辞苑』によれば、「(難解な、または大部の書物や書類を) すべて読み通すこ

と」とある。「登破」という言い方もある。その「破」にこめられた意味を考えてみたい。

過日、先進的な試みをしているある市の公立図書館を見学した。市の職員はほんの数名で、図書館の主な業務は専門の業者に委託されている。迅速で効率的な運営が行われているとのことである。図書館の中を説明を受けながら見学させていただいたが、目を見張る思いをしたことが少なくなかった。たしかに便利で効率的ではあろう。しかし、市立図書館として市民の要求をどれだけ汲み上げていくことができるのであろうか、ということについて一抹の不安を感じたことも事実である。市民の図書館として充実していくとはどのようなことであろうか。帰りのバスの中でそうしたことが想われた。

大学における講義は、普通、一学期2単位である。それは90時間の学習活動に対して与えられるものである。教室の中で行われるのは30時間である。それに倍するだけの学習活動（研究）を受講生は一人ひとり自分で行わなければならない。大学の諸施設はそれにふさわしく整えられていなければならない。図書館はそのための重要な施設である。そうした観点からも現状をよく検討し、さらなる充実を求めているかなければならないであろう。